

展 景

季刊

No.120



Winter 2026

目次

村社めぐり〈短歌〉		布宮慈子	4
初秋〜初冬〈短歌〉		大橋千佳子	6
鶴見線〈短歌〉		小野澤繁雄	8
冬の虹〈俳句〉		新野祐子	10
〈那須通信 65〉さて、今年は.....		加藤文子	12
〈薫風颯々 39〉曼殊沙華		神村ふじを	16

対詠「きげんいかが」 PART 96		小野澤／梅津／布宮	18
前号作品短評 A			20
前号作品短評 B			23
無二の会短信			26
編集後記			30

今号のイメージ／大根

村社めぐり

布宮慈子^{やすこ}

地藏尊参りの案内きてをれど場所も何も知らない わたし

わからねば話を聞かむといふ友が近所の先生に頼みに行きぬ

古文書や歴史に詳しくふさはしき人をり鈴木勲先生^{いさを}

早速に日にち決まれば心はづみ「村社めぐり」のチラシをつくる

雨降らずクマ出ないやうにそれだけを十月の月に祈りてねむる

朝日さす東屋前^{あづまや}に集まりし九人の中に区長さんもゐる

先生はコースを考へ念入りの資料も用意してゐてまづ挨拶す

熊蔵^{*}の建てたる馬頭観音は屋敷神なり話に出で来^く

*曾祖父の布宮熊蔵

地藏堂、馬頭観音、水神や荒神堂^{くわうじん}と稲荷神社へ

天気よく皆しやべりつつ終はりたる村社めぐりの写真をシャツと

初秋ゝ初冬

大橋千佳子

嘴と眼でいっぱいの顔を向け三羽四羽とダチョウ寄り来る

五ミリほどの殻背負うヤドカリもいて仲秋の潮だまりにぎやか

アラ70の姪に囲まれ笑顔なる叔母七十余年をさまよう

午後はフリー鍋やらザルやらフル稼働スローフードを作りだめする

スープ鍋の湯気を味わい徐に換気扇回す初冬のキッチン
おもむろ

越冬のカメムシといえど動くものの壁登りゆく我が家にも生

一冬をゴメンあなたと暮らせないカメムシの背にガムテープ貼る

干し柿は気が揉めるのも一興で 陽当たり、落下、渋は、カビはと

「おしたじ」は母の古びた言い回し女房言葉と知るや知らぬや

遠ざけて安穩だったまた人と関わる仕事断れずおり

鶴見線

小野澤繁雄

上板も下板も中板までも遊びのように十八歳のわれ

「痛くない」は時代のものか看板は痛くない矯正矯正歯科に

前席はシート七人顔いじって一人スマホ六人すべてか

駅キャラというものがあ鶴見駅駅のトイレでしりぬつるつく

ワンマンで三両編成鶴見線兄が通いし線に今日乗る

十五分はいられるというそのホームホーム目の前船がつづいて

関東の駅百選のそのひとつ乗車駅証明書発行機あり

目的地ないは同じに海芝浦ホームに降りてホームをもどる

ベトナム戦争の時代の記憶そのなかに探して安善駅名^{えきな}

駅前のモスにもありて今日鶴見郡山でも駅前のモス

冬の虹

新野祐子^{にいの}

柿くらい食べさせて 仔熊撃たれる

解体師のおみなの髪に蔦かずら

小さな餅工房にて三句

霧襖^{きりぶすま}のけぞるほどの注文受く

70は働き盛りすさまじや

ネズミ捕るイタチに歓声和むかな

干柿上手につくる人にジェラスです

白鳥飛来新しきペン友ひらり

雪^{ゆきもよ}催論者の選ぶ一字は「謀」

狐のだます私でいたい目を濡らし

冬虹くぐる性善説を生きてきて

さて、今年は……。

加藤文子

一月半ば頃から、徐々に日が長くなる。外はとても寒いんだけど、心の中では春を想っている。今年はどんな出会いが待っているのだろう、何が起り展開していくだろう。

春たけなわ湧き出るミドリに心はずませる。

夏は日射しを避けながら草取りしたり、体が続くように工夫して外仕事をする。それでも暑い暑いとボヤいてみたり、休憩にはアイスクャンディを頬張る。

猛暑の下での盆栽の水やり、ひと鉢ひと鉢目を配って見落とさないよう心を凝らす。これだけは怠ってはいけないと……。

汗をぬぐいながら木陰に身を置いた瞬間、涼しい風が通り過ぎることがある。この体感も格別。トンボが飛び交い、チロチロ虫の音が耳に届くようになって、暗くなるのもはやくなって、秋到来である。数日を境に雨に冷たさを感じる。ぬか漬けのつかりも遅くなった。



ゲンノシヨウコの赤紫の花が茎を伸ばしながらこぼれ咲こうとしている。いつの間にか増えたホトトギスが茎を弛ませて、棚下の地面すれすれのところでうす紫や白色の花を咲かせている。リンドウも蕾を膨らませて張り切っている。

コムラサキの紫の実、ウメモドキや西洋カマツカの赤い実等、かつ色を帯びた葉と共に、庭は秋色に染まりはじめる。

来春開花する木ブシの房状の花芽が目に残まる。次の春も来るよネ、そんな思いが頭を過る。

今年は隣の林のクルミが豊作のようで、リスが頻繁におとずれる。庭のあちらこちらに食べ残しが殻と一緒にころがっている。忙しく動きまわる姿が可愛い。こんな光景を目にするのは、はじめてだ。

暑さに飲み込まれそうになった夏から解放されて安心したのか、秋のはじめ夫も私もめずらしく調子をくずす。大したことではないと思っていたところが、アレヨアレヨという間に悪化してしまい、回復に時間があった。

とはいえ展覧会の搬入搬出の日程をぬうように発症してくれたので、支障を来さずに済んだことは幸いだった。

些細な事柄がどんな方向へ向かうのかわからない。物事は未知数のことを孕んでいる。数日不調がつづいただけで、困惑する自分もいた。

普通に動けて、ごはんがおいしくいただけで、何でもない日常が送れることは、なんて幸せなんだろう。

そういえばネッククーラーの存在を知って、みんなで着用したのもこの夏。冷蔵庫から冷えたのをとつかえひつかえ交換しながら首に巻いていた。使ってみたら良かったので知り合いに教えた

ら、みんな知っていた。知らないことがたくさんある。



思わず見とれてしまう

曼殊沙華

神村ふじを

曼珠沙華の標準和名は彼岸花である。彼岸花は日本全国の野山で普通に見られるが、中国から渡ってきた外来種らしい。

俳句の世界では、子季語こきごと呼ばれ、親となる季語の持つ感覚をより繊細に表現するために使われることがある。曼珠沙華は天界に咲く赤い花を表す梵語であるため、死人花、天蓋花、幽霊花などが子季語となっている。秋、田畑の畦や土手に群生する。墓地の近辺に見られることが多いためか、彼岸花と呼ばれることが一般的である。

「じゃがたらお春」と呼ばれた女性こきごは、長崎生まれの少女である。生年は定かではないが、寛永年間（1624～1644）の始め頃の生まれだと言われる。そんなお春は、寛永十六年（1639）、ジャガタラ（現インドネシア）へ流される。つまり流罪である。罪状は外国人と日本人との間に生まれた子どもであること、ただそれだけだった。

平戸に伝来したキリスト教は、繁栄、弾圧、潜伏の時代を経て今がある。特に250年余りに及んだ長く厳しい弾圧時代、長崎の町では数々の悲惨な出来事が起こった。その悲劇を味わったひとりが、外国人と日本人との間に生まれたまだうら若き少女、「じゃがたらお春」であった。

赤い花なら曼珠沙華 阿蘭陀屋敷に雨が降るおらんた

濡れて泣いてる じゃがたらお春

遠いジャガタラの地で、故郷恋しさのあまり、南蛮船に手紙を託したお春。それを取り上げたのが昭和十四年（1939）のこの曲「長崎物語」（梅木三郎作詞、佐々木俊一作曲）である。罪のない我が身、あまりの理不尽さ、曼殊沙華の赤い花があまりにも悲しい。長崎市玉園町の聖福寺境内には「じゃがたらお春の碑」があり、歌人吉井勇の歌を言語学者新村出が揮毫している。

生きながらにして曼殊沙華が似合うかのように謳われたお春。この季語に希望とか未来とかを見出すことはほとんどできないが、せめてこのような俳句で稿を終えたいものである。

黄泉の国きつと夕映え曼殊沙華 萩野谷三和

対詠 ぐきげんいかが? PART 96 〈2025-26〉

N U O
小野澤繁雄
梅津純子
布宮慈子

校庭の見ゆる部屋なり二階からわれら時々子を眺めて	10月29日	N
雉をみたみたみたという人多し若松町は畑地なれども	11月1日	O
橋梁の景色は遠く見るものか絶景半分只見線車中	11月2日	U
五、六軒先の家が燃えてゐて火柱立つをキッチンから見つ	11月3日	N
牛小屋の牛も焼けたがのこるよう小さい頃の火事の思い出	11月11日	O
家ひとつ焼け落ちる様見届けき慄きと昂ぶりのなか里人寄りて	11月16日	U
里山が紅葉するころ庭の木の冬支度せむところ忙しも	11月19日	N

ちりとりに箒みることみちに出て柿の葉片している女性 ^{ひと} がみゆ	11月21日	O
水の無き側溝埋むる柿落ち葉明日こそ上げむ雪が近づく	11月22日	U
落ち葉ふるスタジアムでの最終戦 南選手はけふ引退す	11月29日	N
こんなにも囲われなれて中学校声の昇るやテニスコートに	12月2日	O
クリスマス寒波といふほど降らなくてわづかに積もる雪 ^{ゆき} 囲ひの上に	12月29日	N

2026年

こどもいてついてきている犬もいる初の稽古かテコンドー道場	1月5日	O
雨降つても雪が降つても散歩する田中さんちのフクといふ犬	1月11日	N
水路にも橋その下に鯉がいて犬のようにも呼んでみたこと	1月15日	O
山形の米沢あたりで有名な「鯉のうま煮」をこのごろ食さず	1月19日	N

前号作品短評A 〈小野澤〉

●あめんぼう飛べ水無し池は奈落なり

新野祐子

猛暑の夏がようやく、それでもすぎて秋になって、今この一連「炎暑」を読む。寒い日もある。年齢か、暑さにも寒さにも弱くなっているじぶん、に気付く。

冒頭の句。描写されているもの、場所いずれにも在所感（懐かしさ）がある。加えてクローズアップ感もあるよう。あめんぼう（アメンボ）は水生昆虫、羽をもち飛ぶこともできる。イネにとっては益虫である。夏の季語で、それがフォーカスされた。

痰切れぬやまいだれに焰でありて

文字について解く、そんな句か。炎が焰になっている。痰切れぬ、そのすさまじさ。それが炎暑（タイトル）にもある。

夕陽より赤いトマトというべきか

より（赤い）、という比較でなく、夕陽というより、か、直喩。

千手観音の句、千手あることはないが、ありったけの手。喜雨が（晩）夏の季語とされ、ときに農作物に関係する。変換は、祈雨が多い。数の多さということでは、八百の山鳩（八句目）もあ

り。全体に外部、絵柄の大きさ、身振り、力強さ、そんな印象がある。

青鷺のあらそう声のかつてなく

千手観音千手を上げる喜雨の中

●大石田にて茂吉は川と出合ひしか最上川のそばに暮らして

布宮慈子

冒頭に「未来 山形大会」に参加して五首、とする断り、その五首のうちの一首。大石田にて、（から）は疎開時代の出合いか。もう一首にも、最上川が出ている。山形県南村山郡金瓶村（今の上山市金瓶）に生まれた茂吉。

金瓶かなかめは蔵王の裾野であるゆゑに最上川は遠くて見えず

茂吉には蔵王の歌も多く、しられている。てもとの「斎藤茂吉歌集」（岩波文庫）で表紙カットが蔵王、金瓶からみえるそのまま。茂吉記念館にも寄ったよう（学芸員・五十嵐さん、の歌）。記念館でしることも多いが、こんな風に詠む。

さまざまに光当てれば見えてくる斎藤茂吉の面白さなほ

後半は、ノルディックウォーキングの話から。健康教室のプログラムのよう。二本のポールを用意して、がいかに（ノルディック）な感じ。

金色の秋の道を歩くため二本のポールを用意して待つ

一連タイトルが「秋の道」。これもクマ騒動で、体育館内でのウォーキングとなる（八首目）、のは、東北（ほか）各県に及ぶ。こう詠う。

人間を恐れぬクマが出でくるは北海道の話にあらず

クマ被害は、今や国際ニュースになっている。確かにこの歌のよう。

前号作品短評B〈慈子〉

●数知れぬ小花盛り上げ狂ひ咲くボタンクサギは甘き香失くし

梅津純子

ボタンクサギという珍しい草花を取り上げた歌が七首ある。

久々の雨に潤ひ薄紅のクサギの花に甘き香戻る

遠き日のカルシウム錠剤蘇るボタンクサギの葉と木の香

ボタンクサギを調べると、じつに可愛らしい小花が集まり半球状になっている写真が出てくる。葉は大きく、枝や葉に傷をつけると悪臭がすることからクサギと名づけられたとある。しかし、花は名前と違って、よい香りがするらしい。インターネットではその匂いや香りが伝わらないので、推測するだけである。三首目の「遠き日のカルシウム錠剤」は、なんとなく想像はつく。きついやいや飲まされたのだろう。

作者と電話で話した折「ボタンクサギ、よかったらあげましようか？」といわれた。以前、草木染めをしていたときに貴重なクサギの実を集めて、シルク素材をブルーに染めたことがあった。そのときのクサギの匂いを思いだし、丁寧に断りした。

●バスからは地域置賜日がかげり日向になりて稲穂夏雲

小野澤繁雄

題の「置賜」は山形県の内陸南部を指す地名である。「おきたま・おいたま」と両方の読み方が許容されているが、埼玉（さきたま→さいたま）と同様に「おきたま」のほうが古い語だという。JR東日本の駅名は「おいたま」。一連には「デブリそのポータルサイトの案内も」とあるから、のり鉄の作者は福島から山形に入り、新潟に抜ける鉄道を選んだようだ。福島経由で山形に来るには、景色もいいが、その昔スイッチバックで通っていた線路を見ることがするのも面白い。また、米沢駅から新潟県の坂町駅を結ぶJR米坂線は、二〇二三年八月の豪雨で被災した。以来、今泉（山形県長井市）―坂町（新潟県村上市）間の67・7キロは運休が続く。現在その区間（全13駅）は、代行バスによる代替輸送（というのだそうだ）が行われている。少子高齢化などで利用客が減っているローカル線。米坂線に限らず、今後どうなっていくのだろうか。

代行バスは駅に寄りつつそれぞれに線路を跨ぐ中郡今泉駅^{いん}辺

毛糸とキンチョーの看板そののみが集落飾るいつの頃より

ながながと越後に下るそのみちは大道ならぬ木隠れに家

今泉から坂町に行く代行バスに乗った作者。バスから見える景色により、現在の沿線付近の様子が描かれる。作者はあくまでもバスではなく、鉄道に乗って移動したかったのだろうか、この先、米坂線の復旧の見通しは甘くはなさそうだ。

◆「令和の百姓一揆やまがた」への参加は、農業者の活気や連帯に気おされる一日となりました。さらに印象的だったのは、嶋遺跡公園で楽しむ家族たち。幼児・児童、そして若い親たちが、こなにもたくさん住んでいるのか、山形のこの辺りには。行進の後ろのほうでも、子どもたちがお祭り気分です歩いてます。ちょっと晴れやかな気分になりました。

大橋千佳子

◆文化の日を含む十一月三連休の初日。青森までいこうと、川越まででて、駅券売機でチェックしたら、午前中のはやぶさがみな満席だった。青い森鉄道に乗るつもりだった。駅でしばらく思索していたところ、まだいっていなかった海芝浦（駅）が、頭に浮かんた。鶴見線である。沿線に、兄が長く通っていた通勤先、火力発電所がある。人に面影が残っているように、駅名が残っていることもある。今号の「鶴見線」の話。

小野澤繁雄

◆つい最近まで、柚子の北限は栃木県の茂木町だと思っていた。我が大江町と交流があり、時折茂木町の柚子が入って来ていたからだ。だが、二〇一一年の震災後岩手県陸前高田市が「北限の柚

子」をブランド化し、力を入れて栽培していることがわかった。温暖化の影響もあり、北限が上がつつあるのだろう。サクランボも北海道で栽培しているという話も聞いた。ともかく冬至に南瓜と柚子風呂は欠かせない。「北限の柚子は震災乗り越えて」

神村ふじを

◆私たち小さな農産加工グループの経営の柱は餅である。この米高騰の時期に餅の値段を上げなかったからか、ある生協から毎回注文が昨年の二倍のペースで来た。十一月、十二月はほとんど休みなく働いた。朝七時に家を出て夜七時に帰るという日も度々。私たちの身の丈をはるかに超える受注を皆で力を合わせてクリアできたこと、自画自賛していいかな。それにしてもくたびれた。「展景」の原稿提出、丸一カ月遅れてしまったのはこのせい。すみませんでした。餅米は約四トンを加工し、残すところ一トンとなる。仕事は一月いっぱいでおしまいに。忙しくなるとピリピリしてきて感情的になり、年だけ取って練れていない自分に恥じてしまう。

去る十一月二十四日、山形市内で「百姓一揆」が行われた。私たちも万障繰り合わせて参加した。比較的若い人たちが実行委員になり、参加者も若者が多く、心強いものがあつた。デモ行進をした嶋地区はキラキラの家が建ち並ぶ新興住宅地。初めて訪れたが、ついこの間までは田園であつたことは容易に想像がつく。この平坦で水の利もよさそうな広大な田んぼが開発の波に洗われたのだな。中山間地は放棄されてしまった。地の利のよい所で生産高を上げるとすれば、機械化と肥料

や農薬の多投が基本になるだろう。複雑な気持ちにさせられた。十年、二十年後に食べ物を作る人がいなくならないことを願うばかりである。

新野 祐子



◆昨年の三月に渋谷や原宿で行われた「令和の百姓一揆」は、トラクター三十台ほどを先頭に四千人超が参加して盛り上がったようだ。欧米並みの農家への所得補償の実現などを呼びかけたもので、実行委員会代表は菅野芳秀さん。菅野さんは山形県の農家で、「いま農村では『農終い』^{のうしま}という言葉が交わされている。農家を守りながら消費者と連携し、食と農と命を大事にする日本に変えていかなければ」と語っている。十一月には、山形市でも「令和の百姓一揆」として市街地をデモ行進し、シンポジウムも行われた。今号には、山形の百姓一揆についての短信がある。ぜひ、お読みください。

◆生まれ育った町に引っ越してきて一年が過ぎた。地区の地藏尊の春祭りや秋祭りの案内が来るのだが、自分がよく遊んだ神社や寺のこと以外はほとんど知らないことに気がついた。そんなことをしゃべっていたら、郷土の歴史に詳しい先生がそこにいらっしやるではないか、みんなで話を聞こうと早速動いてくれた人がいる。先生は快諾してくださり、とんとん拍子に日程等が決まった。その企画を区長に伝えたところ、地区の行事にしてはどうかと言ってくれた。当日、何人集まるか、天気はどうか、クマ情報はこないかなど心配していたが、大丈夫だった。先生を先頭に歩きなが

ら、さまざまな説明を聞いた。みなさん顔見知りなので、先生にどんどん質問し、各自の思い出も話しながら楽しく歩いた。外側がみすばらしくなった荒神堂なのに、中に入ると四十八枚もの天井絵があつて驚いた。これまできちんと受け継がれてきたのだなあと改めて思った。地区の名の下工^{しもく}は、下工藤小路^{しもくどうこうじ}の略だった。初めて聞くことが多く、二時間の村社めぐりはとても有意義なものになった。先生が用意してくださった資料「下工藤小路散歩」を読み返している。

いま『ロック・キッチン』（川内有緒、講談社、二〇二五年十一月）を読んでいる。本の紹介によると、「みんな、なに食べて、どう生きてるんだろ？ 福島第一原発事故から14年、国道6号線（ロック）を旅し、温かくておいしい記憶を綴る。再生と希望に出会うノンフィクション」だ。これが面白い。ときどき、グツとくる。そして、深い。一方、ドキュメンタリー映画「ロック・キッチン」は、二月半ばよりポレポレ東中野を皮切りに全国で順次上映されるとのこと。この映画は、昨年十月に開催の「山形国際ドキュメンタリー映画祭2023」において上映され、大盛況だったらしい。が、当方はプログラムを手にしたもの、昨秋は「ドキュ山」に行かなかった。こんど全国上映の際は、ぜひ観たいと思っているところだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景 120号

二〇二六年一月二十七日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

info@muninokai.com